

# 体罰考

浦野裕司

三月中旬に、自宅宛てに郵送で脅迫状が届いた。

「お前の教え子の親からの依頼で行動を開始する。私たちに依頼した内容は次の事だ。お前は以前教え子だったAに酷い言葉で心を傷つけ人格を否定した。よってAは酷いうつ病になり自殺未遂を繰り返して現在は薬物障害になっている。心身ボロボロにされたAの家族はお前に同じ思いをさせてやると誓い私たちに復讐の依頼をしてきた・・・」(以下略)

この脅迫状には、さらに、「復讐行為を止めなければ三百万円をタイの指定の住所へ送るよう」と指示されていた。報道によれば、同じ文面の脅迫状が送られた教師、元教師は、全国で二千人以上に上るとのことである。

この文書に関しては、すでに教育委員会から情報が入っ

い仕打ちがもとなり、精神を病んで入院を繰り返しているという。過去のつらい出来事を文章に表すことで自らを再生させたいと考え、私小説のスタイルをとって書き上げた文章なのだそうだ。カウンセラーに対して「ぜひ教師に読んでほしい」という願いを託したとのこと。それが小学校で教師をしている筆者の所に転送されてきたのである。

そこには、辛い日々の出来事がこれでもか、これでもかと書き綴られていた。

以下、その一部を紹介する。

(著者名はペンネーム、登場人物はすべて仮名)

## 「不登校とともに歩む」

春日部 優仁

### 第一章 いじめ

#### 一、始業式

その朝、健二は、春の雨の中を校門から玄関まで、小走りに向かった。今日、健二は、三年生になる。

ていたので、開封して文面を目にした時に「ああ、あれだな」と思った。しかし、気分の良いものではない。かれこれ三十年以上教師をやってきて、「酷い言葉で心を傷つけてしまった経験がないか」と言われれば、無いとは断言できない。教師という仕事をやっているかぎり、子どもを育てることを意図して、厳しいことを言わなければならぬこともある。私自身は人格を否定するような言葉を発したことは無いつもりだが、受けての子どもがそう感じた可能性がゼロであるとは言い切れない。

不快な脅迫状ではあったが、体罰について改めて考える機会を得た。子どもたちへの指導の在り方や投げかける言葉の内容には十分な配慮をしなければと、自らを戒めているところである。

#### ある訴え

カウンセラーをやっている友人から、原稿用紙の束が届いた。手書きの原稿が三百枚。小学校時代に、担任教師による執拗な人格否定や体罰、クラスメイトからのいじめに遭い、不登校になってしまった顛末が書かれている。著者は現在、二十台後半の青年だ。小学校時代の教師からの酷

玄関には数人の先生がいて、その中に、一、二年生の時担任だった、山田先生がいた。

玄関でくつを脱ぎ、上履きに履き替えた時、間違えて二年生の時のくつ箱に行って、先生に

「健二くん、そこ、二年生の時の所だぞ！もう一回、二年生やるか？」

と冗談めかしに言われ、健二は恥ずかしさと照れで顔を真っ赤にしてしまった。

改めて三年生のくつ箱にくつを入れると、山田先生は、

「ハイ、健二くん、進級おめでとう！」

と言って、一枚の紙を渡してくれた。それは、新しいクラスと、担任名が書かれている紙で

「三年一組、石山厚」

と書かれていた。どうやら新しい担任は男の先生のようなだ。

幼稚園の時から今まで、健二は男の担任とは縁がなかった。

(初めての男の先生だ！どんな先生なのかな？怖いのかな？面白い先生だと良いな？)

と思った。

ドキドキしながら教室に入り、ランドセルを机の横にかけ、席で待っていた。

しばらくして、地域の野球部で一緒のスンスン(金子一正)が、

「なんだ、健二も一緒か！」

「おう！スンスンも、一組か！」

と言った。しばらく話していると、やはり野球部の、坂田謙太が、スンスンと同じことを言いながら入ってきた。

健二もスンスンに言ったことと同じことを言って三人でしばらく話していると、二年生の時にクラスで一番仲の悪かった柴山裕太が、大きな声で

「また、健二と一緒に最悪！」

と言って入って来たので、健二は

「それはこっちの台詞だよ！」

と言い返す。

ここで少し、柴山と健二のことについて触れておく。

柴山は、二年生の時に転校してきた。転校生と言えば、最初の頃はほとんど言葉が発しないイメージがあるが、柴山の場合、転校初日から油紙へ火がついたようにベラベラとしゃべっていた。クラスの班長決めでも、誰より先に手を挙げ、この頃から柴山は健二を目の敵にするようになった。

話を戻そう。

続々とクラスメイトが入ってきた。十分ほどして、始業式が始まるので体育館に集まるように言われた。みんな新しい担任のことで頭が一杯なようで、口々に

「新しい先生って、どんな人かな？」

などと言っている。体育館に全校児童が集まると、ざわついてきた。

始業式が始まった。校歌斉唱が終わると、校長先生の話が始まる。まず校長先生は

「みなさん、進級おめでとう！」

という言葉から始めた。そして、新年度の心構えなどを話しているのだが、健二も含めたほぼ全員の前の中にあるもの……。

それは、

(新しい担任は、誰なのだろう) ということだった。

しばらくして校長先生が

「みなさん。新しい、先生のことを気になっていると思うので、私の話はこれぐらいにして、新しい先生を紹介しましょう」と言った。

体育館には、雨の音だけが聞こえている。一年生の担任から紹介され、いよいよ健二達のクラスとなった。

校長先生が

「三年一組、石山先生」

と言うと、石山は

「はい」

と言って、健二のクラスの前に立った。

この時、健二は

(この先生、ちょっと怖そうな先生だな！イヤだな) と思った。この時の健二の直感は、後に見事に当たることになる。

雨の中の、始業式は、こうして終わった。

## 二、ブタマン

始業式が終わわり、教室に戻ってしばらくすると、石山が入ってきて

「これから二年間、よろしくお願いします。先生はまだ、みんなのこと、よく分からないから、これから出席取るよ」と言った。

その時に、何でも良いから、簡単に自己紹介をしてほしいと

「早く、自己紹介しろよ」と言った。

健二は

「僕は、野球部に入ってます。本も好きです。よろしくお願いします」

と、一応自己紹介をした。しかし内心は恥ずかしさで一杯だった。

「いくら太っているからといたって、何もブタマンなどというあだ名をつけることはないではないか」と思った。

それからは毎日、ブタマンと呼ばれた。クラスの中だけではない。一年生や二年生からもブタマンと呼ばれた。

今の健二なら

「先輩にそんなこと言ったらダメだよ」

くらいのことは言えるだろうが、なにしろ小学校三年生になったばかりであるから、そんなことは言えなかった。

「ブタマン」

と後輩から言われる度に、走ってその場から逃げたってしまうような毎日だった。たまには言い返すこともあったが、それでも「二年生からは

「だって、石山先生が、言ってたぞ！」

とか

「ブタなんだから、いいじゃないか」

などと言われるようになった。

確かに、当時の健二は太っていた。だからという訳ではないが、クラスの中で「ブタマン」と言われるだけなら我慢もでき

と元氣よく返事をしたが

「お前デブだな！ はい決まり、お前のあだ名はブタマンだ！」

と言った。

石山のこの一言でクラスは笑いに包まれたが、健二だけは凍りつき、頭の中が真っ白になった。

我を忘れて自己紹介ができなくなっていると、石山は舌打ちし

た。しかし、一年生や二年生にまで言われると、さすがに落ち込んでくる。  
クラスの中だけでなく、一、二年生からもブタマンと言われて、とうとう健二は学校に行くのがイヤになってきた。それでもなんとか、毎日、学校へ行ってはいたが。  
土、日は野球の試合や練習をしていた。健二は野球が下手ではあったが、二年生の時までは、それでも楽しく練習をしていた。

この日もそうだった。いつもと同じように、楽しく練習をしていたが、なんの用事なのかそこに石山が来ていて  
「ブタマン、お前、野球下手だな…。だから、お前のチームは弱いんだよ」

などと言って、あそっかやウーじイと大笑いした。  
ブタマンと言われるし、野球のことでも色々と言われるし、

ほとんどん学校へ行きたくなくなった。  
この頃から、健二の顔から笑顔が消えた。いつも、どこか浮かない顔をして思い悩んでいるように見えた。

ある日、健二は思い切って母親に

「いつも学校で、先生からブタマンで言われてイヤだ」

と言った。

すると、母親は、

「そんなにイヤなら、きちんと先生にイヤだって言いなさい」

と言った。母親にこう言われると、子供というものはどういう訳か勇気が出るらしく

「わかった」

と言って、その日は寝た。

次の日、学校へ行くと石山はもう教室に来ていて、健二が行くくと

「ブタマン！来たな！」

と笑いながら言うので

(今だ！！)

大きく息を吐き、石山に

「先生、僕のことを二度とブタマンって言わないでください」

と言った。

言い切った健二はほっとした。その健二の、真剣な訴えを聞いて、石山は

「ごめんね」

と言ったのだ。

この石山の一言を聞いて、健二は心からほっとした。

(先生も、きつと、もうブタマンなんて言わないだろう。何しろ、今、こうやって謝ってくれたんだから)

その日は、ブタマンと呼ばれることはなく、家に帰り、野球の練習へ行った。

月曜日の朝会終了後、教室で朝のホームルームをしている時、

いつものように石山が出席を取った。健二を呼ぶ時に石山は

「ハイ、ブタマン」

と言った。

健二は返事をしなかった。

すると、石山は、

「ブタマン！ブタマンはいないの？」

と言って周りを見回すと

「何だよ…ブタマン居るじゃないかよ！返事しろよ！」

と言って、何か思い出したように、

「そうだ、一昨日、こいつ、俺にブタマンで言うとかぬかしやがったな！ブタマンなのにな」

と言い、大笑いした。

この頃から、健二に対する石山の「いやがらせ」は本格的になっていった。ことあるごとに「ネタ」にされ、それが笑い話となる。

健二が石山に

(ブタマンで言わないでください)

と言ったのが、いけなかったようだ。

何かにつけて、

「バカ」

だのなんだのと言われるようになった。

この日も例のごとく、健二は

「ブタマン」と呼ばれたが、返事をしなかった。すると石山は

「じゃあブタ…」

と言った。

やはり返事をしなかった。

三度目に石山は、

「じゃあ、デブ」

やっぱり返事をしなかった。

その時、石山の顔色が変わり、健二を前に引っ張り出し、

「デメエ、何で返事をしないんだ！」

と言うので、健二は

「ブタマンでも、ブタでも、デブでもないからです」

と反論した。

すると、石山は怒り出し、

「デメエ、誰に口きいてんだ！」

と言って、教室中を引きずり回した。

しばらくして、健二を引きずり回すのに疲れたらしく、教室のドアを開けて一言

「帰れ！」

と言った。

健二は、何が何だかわからなかった。教師の勝手な都合で、変だ。ひどい名前の呼び方をし、それに反論すれば引きずり回され、そのあげく

「帰れ」

である。

当然ながら健二は、帰ろうとしなかった。すると石山は、再

び

「帰れ！」

と言った。

そこに高本昭和というのが、のこのこと遅刻して入ってきたので、今度は、石山の怒りは高本に向けられ、

「デメエ、何、遅れてんだ！」

と言うので、高本が

「すいません、寝坊です」

と言うと、高本の服を引っ張り、今度は高本を引きずり回した。高本も、十五分程度の遅刻でここまで引きずり回されるとは思っていなかったようので、さすがにびっくりしていた。

それから数日後、高本は、ほとんど学校に来なくなつた。その後もことあるごとに、石山は怒り出す。男女問わず怒鳴

り、八つ当たりをする。あそっかや、ウーヰイ、ウルちゃんは、それを樂しげに見ている。

クラスの女子達は、イヤな顔をしながら、その光景を、静かに見つめている。

女子達の中には  
「自分達でさえ安全ならば、それで良い」と、思っていた者もいたようだ。

それも、そうかもしれない。小学校三年の女子児童が、大人の、まして男の教師に「力」で適うはずもなかった。

あそっかは、そこそこ勉強もでき、どういう訳か石山に気に入られていたので、石山の「的」になることは全くと言って良いほどなかった。

その日、健二は算数の授業についていけなかった。もともと頭も良くなかったし、算数と理科は特に苦手な教科だった。教科書の問題の意味も理解できないし、問題を解くこともできない。そのため、授業が中断してしまうことも少なくなかった。みんなには申し訳ないと思いつつも、なかなか前に進めない。

この日、石山は、何度教えても理解できない健二に腹を立て

「健二、お前、どうして解ろうとしないんだよ」

と言いつつ、いきなり教室のドアを開け

「帰れ！」

健二が、

「イヤだ！」

と言うと、石山は

「イヤだじゃねえ、早く帰れよ！お前なんか、いらぬ。さよ

と云われるようになった。

思い余って母親に相談すると

「明日、先生に『帰れっ』て言われたら、帰ってきなさい」と言われた。

本当は

「行かなくてもいい」

と言っただけだったが、そうはいかなかった。

翌日、いつもと変わりなく学校へ行くと石山が、いつものように

「何しに来たんだよ！帰れよ！」

と言って、職員朝会に出るため教室を出ていった。健二は、この時は帰らなかった。あそっかやウーヰイは

「お前、何やってんだよ！早く帰れよ！」

と言ったが、健二は何もすることもなく、席でじっとしていた。スンスンは

「帰らなくていいよ！」

と言った。

チャイムが鳴り、みんな慌てて席に着くと、しばらくして石山が戻ってきて健二の顔を見るなり

「何だよ！お前まだ居るのかよ！早く帰んな！さよなら」

と言って、健二のランドセルを廊下に投げた。健二も腹が立ちランドセルを背負い帰ろうとすると、石山が

「おい、今までの荷物、どうするんだよ！」

と言ったが、健二は何も言わず階下へ行った。すると石山が後ろから健二の服を引っ張り

「お前、今、帰ったら、明日からこの学校、来られなくなるん

うなら！」

と言いつつ、健二のランドセルを廊下に放り投げ、そのままドアを閉めた。

気持ちが悪くなってハンカチで口を押えながら階下へ降りて行くと、保健の先生が通りかかり

「健二くん、どうしたの？」

と声をかけてくれた。その時、石山が降りてきて

「健二、お前、何やってんだ！先生、ご迷惑、おかけしました」

と言って、教室に連れて行った。

その後が大変だった。クラス全員に、健二が廊下で何をやってたのか話し

「公開処刑」

と言って、健二を殴り始めた。

公開処刑の理由は

「俺に恥をかかせた」

と言うことだ。

この時、健二は

(テーマが帰って言ったから帰ろうとしたのに、本橋先生(養護教諭)に見つかっただけじゃねえか！)

と、心の中で叫んでいた。

今の健二なら、石山を敵としてけんかをするぐらいの力も技もあるが、この時小学校三年生の健二にはそんなことなど無理だった。

その時から毎朝のように、石山に

「お前、何しに来たんだよ！来るなよ！帰れ！」

だぞ！」

と言うので、健二はささやかな抵抗をして何も言わず、うなずいた。

この時健二は

「こんな学校なら別の学校に転校した方が良かったです！」

と考えていたし、そもそも何故石山が健二に

「帰れ！」

と言うのかも分からない。が、とにかくこんな学校に一秒たりとも居たくない。そう思い健二は、玄関を出て校庭に向かった。

二階のペランダから

「バイバイ」

と「お見送り」をしてくれる、バカな連中もいた。こうし、健二の前途多難な新学期が始まった。

## 第二章 不登校

一、それからの健二

帰宅すると、健二は母親に全てを告げ

「転校したい」

と言った。すると母親は、

「お父さんと、相談してみる」

と言っていた。

父親が帰ってくると、母親は約束通り父親に相談したが、父親は一向に取り合わず

「先生が、そんなことを言うはずがない。もし仮にそう言ったとしても、悪いのは健二だろ？転校なんてさせない」

と云う。  
母親に説得されて翌朝は学校へ行くことを決めたが、何となく気が重い。(できれば、行きたくないな…)と思った。  
学校へ行くと、ウルちゃん、ウージイ、あそっかが  
「おまえ、何しに来たの？早く別の学校行けよ」と言った。

チャイムが鳴り教室に入ると、石山が来て、  
「あれ？ 健二、お前、なんでここにいるんだよ…」  
と言った。

健二は、何も言わなかった。続けざまに石山は  
「早く出て行けよ！」  
と言いい、職員朝会のため教室を出ていった。

あそっかは、健二に  
「お前が居ると迷惑なんだよ！早く失せろ！」  
と言いつつ、さらに

「次、先生が来るまでに失せないと、また公開処刑だよ！」  
などと笑いながら言う。  
しばらくして石山が戻ってきて、いつものように出席を取ったが、健二だけは呼ばれなかった。

あそっかは  
「先生！ 健二、まだ帰ってないよ！」  
と言う。

それを聞いて石山は  
「あり、本当だ！ブタがいる。お前、何やってんだよ！転校するんだろ？早く帰れよ！」  
と言った。

午後三時を回り、父親が帰ってきてやはり驚き、母親に理由を聞くと怒りだし  
「健二！」  
と怒鳴った。

健二が何事かと思いついてみると、  
「お前、何で帰ってきた！！」  
と言うので、  
「先生に、帰れって言われた！」  
と言う、

「バカヤロウ。そんな見え透いた嘘つきやがって。先生が、そんなこと言う訳ないだろう」  
「本当だもん」  
「先生がそんな事、言う訳ない。明日は行けよ」  
と言った。この頃から健二に味方はいなくなった。クラスメイトや両親、学校の先生達、全てが敵だった。誰も信用できなくなりつつあり、ただ一人で闘っているような気がした。

## 二、母の入院

この頃、健二の母親は、糖尿病を患っていた。  
この年、母は足のかかどにできた傷が化膿し、入院することになった。これからはばらく、父と兄と健二だけの生活になる。今までにも一度、三人だけの生活の時があった。しかし今回は、今までと違う。健二は学校へ行けなくなりつつあったからだ。ここで母親が入院するということは、健二にとって何よりの「支え」を失うことになる。そうすれば本当に味方がいなくなってしまう。

健二は答えない代わりに、首を横に振った。しかし石山は、「デメエ、昨日、転校するって言っただろ！」  
と言って、健二の服を引っ張って前へ連れていき、髪を引っ張りながら教室から連れ出し、さらにランドセルを放り投げた。しばらくその場に立ちつくしたが、何とか教室に入ろうとするものの、石山がドアのところにはうきでつかえ棒をしたから、入るに入れない。仕方なく帰ろうと思いつつ、ほかの先生に分からないように、いつもの道とは違う道から帰っていった。家についてしばらくすると、どういうわけか石山が  
「おーい、健二！」  
言いつつ迎えに来たが、返事をせずタンスの陰にうずくまっていた。

石山が、健二の家に居たのは五分ぐらいだっただろうが、健二にとっては五時間、六時間に感じられた。石山が帰って五分ほどすると電話が鳴り、出てみると石山で  
「デメエ、何やってんだ！早く来い！あと十分な」  
などと一方的に言い、電話を切った。

健二は  
（はっ？自分で帰れって言っておいて、今度は、十分で来いかな？！ふざけんな）  
と思った。

この日は三回ほど石山から電話がかかってきたが、出ることもなく学校へ行くこともなかった。午後なって母親が仕事から帰ってきて、健二が居るのに驚き、理由を聞くと  
「そんなの、先生が悪いんじゃない」  
と言った。

しかし、入院するのは仕方ないことで、入院しなければ母親の片足はなくなることになる。それは、健二としても困る。糖尿はあるにせよ、元気な母でいてほしかった。  
この頃から健二は、あまり学校へ行かなくなった。というより、行けなくなった。毎日が怖かった。行けば石山に何と言われ、何をされるか分からない。毎日、目に見えない恐怖に怯えていた。

毎夜の如く「風邪ひかないかな？」とか、「気持ち悪くならないかな？」と思っていた。何とか学校へ行かなくて良い方法を、必死になって考えた。風邪をひけば、学校へ行かなくて良い。健二は、布団をかけず腹を出して寝たりもしたが、こういう時に限って風邪などひかないものだ。

こんな時、母親さえ居てくれれば相談のしようもあったのだが、その母親は今、病の床に居る。ただでさえ大変な母親に、これ以上心配も迷惑もかけたくなかった。

健二は毎日のように、  
「こんな時、お母さんが居てくれたらな…」  
と思った。

無理のないことだった。一人で、今まで経験したことのないことに向き合っている。心細かった。三年生の健二。初めての男の担任。初めての暴力。そんなものとの闘いの毎日だった。学校行かないと父親から怒られ、学校へ行けば石山やクラスメイトからいじめられる。健二の居場所はどこにもなかった。

父親に相談すれば  
「先生がそんなこと、するわけがない」  
の一点張り、責められるのはいつも健二だった。今まで楽し

かった学校が楽しくなくなつた。  
五月になった。早いもので、健二が石山の暴力に耐え始めてから一カ月になろうとしていた。

その頃になると、健二はボロボロになり始めていた。父親からは怒鳴られ、学校へ行けば石山から

「お前、転校したんだろ。早くその学校行けよ」

など言われ、心の支えもない中で一人、闘っていた。

毎日、疲れていた。身体もそうだが、何より心が疲れている。唯一安心できるのは、一週間に一度の母の外泊の時だった。その時だけは、何となく勇気が出て、学校にも野球の練習にも行けた。しかし、月曜日からはまた行けなくなつた。

この日も健二は心が折れ、どうにもこうにも学校へ行けなくなつてしまった。この日、父親が、午後四時に帰宅すると健二が居たので、低い野太い声で

「サボったのか？」

と言うので、健二は

「サボったんじゃないよ！熱があるから休んだんだ」

と言うと、父親は怒り出し

「熱ぐらいで、休むんじゃない。そんな時は一度、学校へ行つて、先生に断つて保健室行くん。それで、保健の先生が帰って言ったら帰ってくるんだ」

と怒鳴り

「今度サボったら、家を出ていくんだぞ！」

と言い放つた。

翌日は、仕方なく学校へ行った。学校へ行くとすぐ、石山は

「おい、転校生、帰れよ」

と言いつつ、教室を出て行つた。入れ替わりに、あそつかとウージイが入ってきて

「あれ、転校生。まだ居たの。学校サボっちゃだめだよ」

と言つて笑つた。

健二は、心の中で（俺はもう……。どうすれば良いんだ！）と自問し、頭を抱えてしまうのが常だった。チャイムが鳴り石山が戻つてくると、

「転校生がまだ居る」

と言いつつ、早速「公開処刑」が始まった。

健二の服を引っ張り前に連れて行き、頭を小突いたり、殴つたりした。鼻血が出た。その時石山は、

「あつ汚ね！」

と言つて健二の服を放すと、健二は後ろに倒れ腰を打つた。それでも石山は

「おい、転校生、立てよ」

と無理やり立たせ、またも「公開処刑」を行つた。

一通り暴力が済むと石山は

「お前が処理しな！」

と言つて、鼻血のついた床を健二に拭かせた。

健二が、泣きながら床を拭いていると

「お前、何、泣いてんの？全部、お前が悪いんだよ！」

と言つた。

その翌日、健二は、また学校を休んだ。背中が痛くて、学校などへ行けなかつた。相変わらず石山は何度も電話をかけてきたり、家まで来たりした。この日の父親の帰宅は早く、二時頃帰つてきて低い野太い声で、

「おい、転校生、帰れよ」

と言いつつ、教室を出て行つた。入れ替わりに、あそつかとウージイが入ってきて

「あれ、転校生。まだ居たの。学校サボっちゃだめだよ」

と言つて笑つた。

健二は、心の中で（俺はもう……。どうすれば良いんだ！）と自問し、頭を抱えてしまうのが常だった。チャイムが鳴り石山が戻つてくると、

「転校生がまだ居る」

と言いつつ、早速「公開処刑」が始まった。

健二の服を引っ張り前に連れて行き、頭を小突いたり、殴つたりした。鼻血が出た。その時石山は、

「あつ汚ね！」

と言つて健二の服を放すと、健二は後ろに倒れ腰を打つた。それでも石山は

「おい、転校生、立てよ」

と無理やり立たせ、またも「公開処刑」を行つた。

一通り暴力が済むと石山は

「お前が処理しな！」

と言つて、鼻血のついた床を健二に拭かせた。

健二が、泣きながら床を拭いていると

「お前、何、泣いてんの？全部、お前が悪いんだよ！」

と言つた。

その翌日、健二は、また学校を休んだ。背中が痛くて、学校などへ行けなかつた。相変わらず石山は何度も電話をかけてきたり、家まで来たりした。この日の父親の帰宅は早く、二時頃帰つてきて低い野太い声で、

「おい、転校生、帰れよ」

と言いつつ、教室を出て行つた。入れ替わりに、あそつかとウージイが入ってきて

「あれ、転校生。まだ居たの。学校サボっちゃだめだよ」

と言つて笑つた。

### 体罰の実態

この後もこの小説では、主人公の被害を受け続けた体験が延々と記述されている。すでに二十台後半の春日部氏だが、今になって過去の体験を文章に表そうと考えたのは、同じような目に遭う子を無くすために、だれかに読んでもらいたいという一心からだそうだ。小説とはいえ、教師やクラスメイトからの暴力や暴言は、現実に行われていたことをほとんどそのまま描写したとのこと。教育に携わる者として、とても現実とは思えない、そして現実であるとは思いたくないような内容である。

二〇一二年に大阪市立桜宮高校で起きた、教師の暴力に

(以下、略)

よる生徒の自殺を機に、全国の公立校で緊急調査が行われた。文科省の発表によれば、二〇一三年度中に体罰をした公立校の教員は五四一五人、体罰を理由に処分された公立小中高校の教員は三九五三人に上るといふ。

一方、体罰を受けた児童生徒は八八八〇人で、「教師が素手で殴る」が五八%もあった。これ以外に教師による暴言の数まで入れたならば、膨大な数に上るはずである。

昨今は体罰防止のための研修が以前より増え、体罰をしてはいけないという意識が高まっているはずである。それにもかかわらず、調査で表面化した体罰だけで八千件を超え、何らかの処分を受けた教師が四千八人近くもいるというのは、異常事態と言えよう。教師の体罰についてネット検索すれば、傷害事件ともいえるようなニュースがざらりと並ぶ。なぜ、さまざまな防止対策を立てても体罰を根絶することができないのだろうか。

### 体罰がなくならない理由

体罰が「愛の鞭」としてある程度容認されていた時代ならまだしも、「体罰は絶対にダメ」という今の時代にあつて体罰がなくならない理由には何があるのだろうか。

それには、以下のような背景があると考える。

①家庭や地域社会での躰が十分にできていなくて、自己中心的な子どもが増えたこと

②児童虐待の件数の増加（厚生労働省の報告によれば、平成十一年度に比べ平成二十四年度は六倍近くに増加しているとのこと。児童相談所への相談件数は六万六千件を超えるという）

③学校現場の多忙さ（学校でやるべきことが加速度的に増え、ゆったり子どもと向き合うための時間的、精神的余裕は確実に減っていると感じる）

こういった背景から、教師の指導が入りにくい子どもたちが増えたり、丁寧に子どもと向き合う教師が減ってきたりしている現実があることは、学校現場に居てひしひしと感じている。しかし一方で、教師の資質にも、教師を体罰に走らせる大きな理由があるのではないだろうかと考え

る。

体罰に走らせる教師の資質とは：

④教師になつていてる人の大半は、学校に適応できた人であるということ

別の言い方をすれば「そこそこ勉強ができ、学校という

場所で良い思いをしてきた人だからこそ教師になつたの

だ」ということである。もちろん例外はあるはずで、学校生活でうまくいかなかった経験を活かそうと考えて教師の仕事に取り組んでいる人もいるだろう（筆者自身、小学校には嫌な思い出があり、まさか自分が小学校の教師になるとは思ってもいなかった）。そのような例外はあるにしても、学校という場所に適応し、学校での良い経験や思い出がきっかけになって教職に就いている人が圧倒的多数なのではないだろうか。

筆者は、教師と子どもの人間関係を中心に学級経営に関する研究を続けてきた（たとえば\*資料【1】【2】）。研究の過程で教師用RCRT（\*資料【3】）という手法を使って「教師の子どもを見る視点」、すなわち教師という役割上、どのようなものさしで子どもをとらえようとしているかが、学級経営の在り方を左右する重要なファクターであることに痛切に感じてきた。

数多くのデータを収集・分析してきたが、学級経営で苦勞している教師には、授業や学級経営を進めていくにあたり以下のような「子どもを見る視点」をもつ傾向が共通して見られた。

・ 素直（従順）か、素直でない（反抗的）か

・ 真面目か、不真面目か

・ 明るいか、明るくない（暗い）か

・ 自己表現が豊かか、豊かでないか

いずれの視点も、教師が子どもを指導する際にもつ視点として、当たり前前のように感じられないだろうか。

これのどこに問題があるのかと思われるかもしれない。ではなぜ、素直で真面目、明るくて自己表現が豊かな子どもに育てたいと考えるような教師が、学級経営で苦勞するようになるのだろうか。

ここに挙げた視点は、教師として子どもたちを指導する際、ある意味当たり前大切にすべきことである。けれども、当たり前すぎて幅がないのだ。

学校に通ってくる子どもの中には、学校が大好きな子どももいれば、なかなか適応できなくて居心地の悪さを感じている子どももいるはずである。よほど親しい人でなければ素直になれない子どももいれば、集団生活の中で自己表現が苦手な子どももいる。「当たり前前の視点」だけで子どもを見ている限り、そういった子どもたちを、マイナスのものさしだけで測ろうとすることになる。

学校に適応してきた結果として教師になつた人の中でも特に、十分すぎるほど学校に適応できたような人が教師になつた場合は問題が起きやすい。自分の「子どもを見るものさし」からはみ出してしまふようなタイプの子どもに出会うと、それを許すことができず悪感情をもつてしまいかねない。「なんでこんなこともできないのか」と子どもを責め立て、なんとか自分のものさしで測れる「良い子像」に近づけようと子どもを変えていこうとする。使命感に燃え、一生懸命子どもを変えよう、育てようとする気持ちが強い「真面目な教師」の中には、子どもを変えようとするための行為を激化させていく者もいる。そして行き着いた先に体罰がある。

### 体罰根絶に向けて何が必要か

教育委員会や管理職が「体罰は許されることではない」と繰り返し唱え、たくさんの研修が行われているにもかかわらず表面化したものだけで数千件もの体罰が起きている現実がある。けがをしたり心に傷を負ったり精神疾患を患ったり、最悪の場合自殺にまで追い込まれたりする子がゼロになるようにするには、何が必要なのだろうか。

子どもを見る視点に多様性や柔軟性があり、かつ豊かな指導力のある教師であれば、体罰に頼る必要などない。真にすぐれた教師であれば、体罰どころか叱責することすらなく、一人一人の子どもの適性をつかみ、子どもたちの持ち味を活かしながらよりよい方向へ導くことができるはずだ。

体罰根絶に向けて今、最も必要なのは、子どもを見るものさしを多様で柔軟なものにすることだ。そのためには、自分がどのようなものさしで子どもを測ろうとしているか、振り返ってみることが必要だろう。教師用RCRTのような専門的な方法でなくても良い。自分のクラスでいちばん指導しにくい子を思い浮かべて、その子の良さを思いつく限り書き出してみようだろうか。同じ子どもについて他の教師にも良さを書いてもらえれば、さらにもものさしの種類が増えるはずだ。

筆者が初任教師だった頃に、定年間近の小柄な女性教師・Y先生が高学年のクラスを見事に統率している様子を目にした。荒っぽい子どももいたクラスではあったが、Y先生が声を荒げて指導する場面を一度も目にしたことがない。トラブルは起こしながらも、子どもたちは毎日、生き

生きと学習に取り組み、立派に卒業していった。

どんな時も優しく子どもを見つめていたY先生の眼差しを、昨日のこのように思い出す。あんな指導ができるようになりたい、と思いつつ三十年以上が過ぎてしまった。未だに、教室で声を荒げてしまうこともある未熟なわが身である。「体罰根絶を」などと声高に言えるような立場ではないが、Y先生を手本として、日々、子どもたちに向き合って行きたいと考えている。

\*資料【1】浦野裕司(2001)「学級の荒れへの支援の在り方に関する事例研究」教育心理学研究 49-1, p.112～122

\*資料【2】浦野裕司(2008)「若手教員の学級経営に関する研修の効果」日本教育心理学会第五十回総会発表論文集 p.253

\*資料【3】近藤邦夫「教師と子どもの関係づくり」東京大学出版会